

2つのパフ

平成 30 年 5 月

沼尾 利郎



60 年代の全米反戦集会

1 PP&M の Puff

1960 年代アメリカのフォークグループである PP&M（ピーター・ポール&マリー）の代表作に「パフ」（原題は Puff, the magic dragon）という曲があります。歌詞の内容は魔法の竜パフと少年ジャッキー・ペーパーとの交流と別れを描いたもので、無邪気な少年もいつかは大人になってパフと遊ばなくなり、悲しみに沈むパフの切ない心境がアコースティックギターの美しい音色とすばらしいハーモニーで見事に表現されていました（全米ヒットチャート第 2 位）。この曲が発表された 1963 年はベトナム反戦の嵐が全米に広がった年であり、同年 8 月にはキング牧師の演説で有名なワシントン大行進がありました。私はこの曲を中学生になった 60 年代後半に知りましたが、下手なギターを弾きながら友人たちとよく一緒に歌った懐かしい曲でもあります。

PP&M の楽曲には人種差別（公民権運動）や反戦など当時の米国社会に抗議するメッセージが込められており（いわゆるプロテスタント・ソング）、ボブ・ディランと共に日本のフォーク界に大きな影響を与えました。そのため、この曲で少年ジャッキーがパフの前に現れなくなったのはベトナム戦争で戦死したからという解釈がなされて反戦歌と受け止める見方もありますが、作詞者は強く否定しています。今では NHK の番組「おかあさんといっしょ」で放送されるほか、小中学校の教科書にも掲載されており、幼児英語教育における定番ソングにもなっているようです。



PP&M

2 血小板活性化因子の PAF

私にとってパフといえば、かつて大学病院で喘息やアレルギーの病態生理を調べていた頃に扱っていた血小板活性化因子 (Platelet activating factor : PAF) が思い出されます。PAF は血小板活性化の他に平滑筋収縮、好中球活性化、血管透過性亢進、白血球遊走活性化、気道粘液分泌亢進、知覚神経刺激などの多彩な作用があり、炎症やアレルギー反応に深く関与することが知られています。ちなみに、ノーベル賞を受賞された山中伸弥先生 (京大教授) の学位論文はこの PAF がテーマでした。私は末梢血から好酸球を分離して PAF の遊走活性を調べたり、PAF 分解酵素である PAF アセチルヒドロラーゼを遺伝的に欠損している患者では喘息が重症化しやすいことを報告して (JCI 1999)、PAF とは「長年の付き合い」があったのです。

大学病院を離れてからは研究に直接関与することもなくなり PAF のことはすっかり忘れていたのですが、抗ヒスタミン作用と抗 PAF 作用を併せ持つ新規の抗アレルギー薬が昨年登場し (ルパタジン)、久しぶりに PAF の名前を目にしました。私が調べていたのは PAF の多彩な作用の中のごく一部だけでしたが、自分が若い頃に基礎研究で扱っていた物質が 20 年以上の時を経て薬剤として臨床の場に登場することは、とても感慨深いものがあります。別の言い方をすれば、“それだけ自分が年を取った” ということですね。



二刀流

3 二刀流

最近の医学界でよく耳にする「臨床と研究の両方できるリサーチマインドを持った医師（クリニシャン・サイエンティスト）を目指せ」との意見は「学校教育における文武両道」「大谷翔平の二刀流（メディアでは two-way player と表現）」みたいな感じですが、私の場合は「周りが皆そうだったので自分も自然に臨床と研究をした」というだけであり、「学会という名の旅行に行ける」（笑）という程度の（軽い）動機で始めた研究が次第に面白くなり、いつしか自分から率先してやるようになったものでした。臨床でも研究でも好きなコトならがんばれるし、特につらいとは思わないのですね（個人の感想です）。しかし妻や子供たちには大変な負担をかけてしまい、家族には本当に感謝の言葉しかありません。我を忘れてあることに熱中・没頭する状態を「フロー状態」と言いますが、当時の医局員のほとんどは独身で医局に寝泊まりする「浮浪状態」の者も多く、ともに苦労したという共有体験が一種の連帯感を生み出していました。臨床と研究に明け暮れていた自分にとっての80年代は、「根拠のない自信」（そのうち何とかなるだろう）と「エビデンスに基づかない行動原理」（やってダメなら変えればいい）が無知な自分を支えてくれた、思えば平和な時代でした…。

もし「リサーチマインド」が臨床医に必要だとしたら、それは自らの手でエビデンスを作ろうと考える野心というよりも、自分の日常臨床を疑う謙虚さなのかもしれません。

臨床から逃げるな！

臨床へ逃げるな！

これはある高名な大学教授の言葉ですが、医師の働き方改革が大きな社会問題になっている「ワークライフ・バランス」の現代ですから、家庭やプライベートの犠牲の上に成り立つような臨床と研究の二刀流は、もはや望むべきではないでしょう。

（宇医会報 2018年5月号掲載 一部改変）